

落葉林にて

東條耿一

私はけふたそがれの落葉林を歩いた。肅條と雨が降ってゐた。何か落し物でも探すやうに、私の心は虚ろであつた。

何がかうも空しいのであらうか。

私は野良犬のやうに濡れて歩いた。

幹々は雫に濡れて佇ち、落葉林の奥は深く暗かつた。

とある窪地に、私は異様な物を見つけた。

それは、頭と足とバラバラにされた、男の死體のやうであつた。

私は思はず聲を立てるところであつた。

よく見ると、身體の半ばは落葉に埋もり、頭と足だけが僅かに覗いてゐる。

病みこけた皺くちやの顔と、粗れはてた二つの足と……。

その時、瞑じられてゐた眼が開かれ、

白い眼がチラツと私を見た。

「アツ、父！」と私は思はず叫んだ

「親不幸者、到頭來たか……。」と父は呻くやうに眩いた。

許して下さい、許して下さい、と私は叫びながら、父の首に抱きついた。

父の首は蛹のやうに冷たかつた。

それにしても、どうして父がこんな所に居るのであらうか、

胃癌はどうなのであらうか、その後の消息を私は知らないのだ。

「胃癌はどうですか、どうして斯んな所に居るのですか、

さあ、私の所へ行きませう。」

私は確かに癪院の中を歩いてゐたのに、はて、一體此處は何處なのか、

私は不思議でならなかつた。

「お前達の不幸が、わしをこんなに苦しめるのだ。」

と父はまた咳くやうに云つた。

私ははやぼうぼうと泣き乍ら父に取縋つて、その身體を起さうとした。

しかし、父の身體は石のやうに重かつた。

「落葉が重いのだ、落葉が重いのだ。」と父がまた力なく叫んだ。

「少しの内、待つてゐて下さい。今直ぐに取除けてあげますから……。」

私はさう答へると、両手で落葉を掻きのけた。

雨に濕つて、古い落葉は重かつた。

苔の馨りが私の鼻を掠めた。しかし、幾ら掻いても、

後から後からと落葉が降り注いで、父の身体にはなかなかとどかない。

私は次第に疲れて来た。腕が痛くなり、息が切れた。

私は悲しくなって、母を呼んだ、兄を呼んだ……………。

どの位経ったのであろうか。

私は激しい疲労のために、その場に尻もちをついた。

ぜいぜいと息が切れた。降り積る落葉は見る見る父の顔も足も埋め盡して、

からから佗しい音を立てた。

「噫、父よ、父よ……………」日はとつぷりと暮れて、

雨はさびさびと降つてゐた。

「親不孝者、親不孝者……………」

何處からか苦しげに呻く父の聲が、私の耳元に、風のやうに流れてゐた……………。

「山桜」昭和十六年三月号